

「生きる意味」について

——フランクルの人間観——

香川 豊

Meaning of Life——Frankl's Theory of Man

KAGAWA Yutaka

Abstract: Today we live in an age of crumbling traditions. Universal values are on the wane. That is why ever more people are caught in a feeling of aimlessness and emptiness. However, even if all human values should disappear, life holds a meaning for each and every individual. Man is responsible for giving the right answer to a question he is asked by life. In other words, Man is responsible for what to do, whom to love, and how to suffer, while Man's freedom is freedom to take a stand on whatever conditions might confront him. And taking a stand toward somatic and psychic phenomena implies opening a new dimension, the spiritual dimension. In this dimension, it is still possible to find a world beyond that of Man. According to Frankl's view, the question of an ultimate meaning for human suffering will find an answer in the spiritual dimension. But Man is incapable of understanding the ultimate meaning of human suffering because the ultimate meaning is no longer a matter of thinking but rather a matter of believing. Moreover, faith in the ultimate meaning is preceded by trust in God. But this relationship between God and human existence is ambiguous in Frankl. It is a problem with his viewpoint.

ここ数十年来、「なんとなく充たされないものを感じる」あるいは「特別大きな悩みが在るわけではないのに、何をしてもつまらない、やる気がない」とこぼす学生が多いように思う。おそらく物質的な豊かさや快適さとは裏腹に、その生活の深層において無意味感や空虚感にさらされているからであろう。では我々はそうした空虚感にいかに向き合っていったらよいのであろうか。フランクル (Viktor E. Frankl) はそのような実存的空虚と対決、生きる意味を追求した精神科医として知られている。ここでは彼の「生きる意味」についての思索をたどりつつ、彼の人間理解に関わる問題点を指摘してみよう。

1. 実存的空虚と生きる意味

フランクルは『意味への意志』の冒頭、いくつかの調査をあげながら、当時 (1970年) 実存的空虚がますます社会的に広がりつつある事を指摘した後、なぜ

実存的空虚が生じるのかと言う疑問に対しまず次のように答えている。

「動物と異なって、本能は人間が何をなさねばならないかを告げることはない。また伝統は現代の人間に何をなすべきかを告げこともない。そして、現代の人間は、自分が本当に何を意志しているのかもはや知らないように思われることもしばしばである。それだけに人間はますます、他人がなすことのみを意志しようとするか、あるいは他人が意志することのみをなそうとする¹⁾。」

人間は動物のように本能 (行動様式) にしたがって生きているわけではない。むしろ、その生きる形からすると自分が育った文化によって決定されていると言えよう。それ故、その文化の伝統が失われるとき、生きる基本的な形が見えなくなり、多くの人が明確な行動の基準や動機を見失う結果となる。さらに自分の主

体的意志さえ失っている者がしばしばみかけられる現代の状況では、それにともなって、他人がなすことだけを意志しようとする傾向(画一主義)や他人が意志することだけをなそうとする傾向(全体主義)が現れるが、彼が指摘するようなある特殊な神経症の状態(人生観や価値観にかかわる精神因の神経症の問題)もあわせて生じることになる。もちろん無意味感はその自体としては神経症ではない。しかしあえてそう解するとするならば社会因性の神経症といえる。つまり、現在の産業・消費社会では、次々と新しい欲望が造り出され、それが消費されて行く社会的仕組みができあがっている。しかし性的欲望が解放され物質的欲望が充たされている先進諸国においては、逆に多くの人が生きる目的を喪失し、意味欲求は、現在の社会的仕組みの中で、かえって欲求不満にさせられているのである。豊かさの中の精神的空虚、価値に関わる伝統の崩壊にともなう実存的空虚、それは後で述べるが時代精神の病理と言えよう。

ところで自分の存在に意味がない(生きがいの喪失)という実存的空虚感に対抗して、我々はいかにして生きる意味を獲得することができるであろうか。

例えば強制収容所でフランクルが出会ったあるブルジョア女性は、そこに入れられる以前の生活においては、自分は甘やかされて、本当に精神的な望みなど追ってはいなかったと述べているが、わざわざ人生の意味を問うということなく生きている人達がいるのは確かである。しかし彼の考えでは、自分の人生を意味ある人生にしたいという意味への意志(*der Wille zum Sinn*)は、人間の行為の根本的動機であり、人間の意味志向性から言えば「人間は意味への意志によって本来支配し尽されている⁵⁾。」

では物質的により豊かな生を追い求めて、例えば仕事中心で生きている人のような場合はどうであろうか。このような人は世界を可能な限り生きる手段として利用するような生き方をしていると言えよう。たいていの場合、我々は自分にとって快いことや都合のよいこと、利益になることのみを求めて生きている。しかし例えば快いと感じることはそれ自体としてはよいことだとしても、快楽を直接求めることはむしろ逆にそれを失う結果になるのが通常で、それは意味や目的を実現する副次的な結果として与えられるものである⁶⁾。また富や名声や権力は意味実現の手段としては重要なものであるが、我々の人生の「何のために」を見失っている限り、それ自体を盲目的に追求することによって意味への意志を満足させることはできない。

後で再び述べることになるが、フランクルによると、人間は性的快楽を追い求める快楽への意志や劣等感の補償を求める力への意志によって駆り立てられているだけの存在ではなく、本来的に意味への意志によって貫かれている精神的存在なのである。それゆえ、意味への意志を満たすことに挫折した場合にこそ、人が欲望追求(快楽への意志や力への意志)に駆り立てられるということが生じるのであり、それによって内的な空虚感を麻痺させようとするのである。アルコールや麻薬、異常なセックスなど快楽を極端な形で求める人が増えていること、あるいはお金や暴力や権力を追い求める風潮が強まっていること、それらはこうした空虚感を埋め合わせようとする代償行為に過ぎないのである。それ故に彼らは生きること自体に実存的空虚感(*Exstentielles Vakuum*)を感じるようになるのである。

「ここで必要なのは人生の意味についての問の観点を転回することである。……すなわち我々は人生から何をまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何を我々から期待しているかが問題なのである。あえて哲学的に言えば、ここでは本格的なコペルニクスの転回が問題なのである。すなわち我々が単に人生の意味を問うのではなくて、我々が自分自身を問われたものとして体験するのである。人生は我々に毎日毎時間問いを提出し、我々はその間に、詮索や口先ではなくて、行為を通して、正しいやり方で適切に答えなければならないのである。人生というのは結局人生の問題に正しく答えること、人生が各人に課する課題を果たすこと、その時々々の要求を充たすことに対する責任を担うことにほかならないのである⁷⁾。」

我々は人生から何を期待できるかが問題ではなくて、むしろ人生が何を我々から期待しているかが問題なのであるという人生のコペルニクスの転回は、強制収容所において、「わたしはもはや人生から期待すべき何ものももっていない」として自殺を企画した二人に、実際に適用されたものでもある。その結果、一人は深く愛している一人の子供がいて、外国で自分の帰りを待っている事に思い至った。もう一人は、科学者としてあるテーマについての本のシリーズを完結するという使命が待っていることに気づいた。具体的な人間や仕事はほかの誰でもない自分を待っていることに気づくことによって、二人の人生はもはや無意味ではなく、意味に充たされたものになったのである⁸⁾。

「彼を待っている仕事、あるいは彼を待っている愛する人間、対してもっている責任を意識した人は彼の生命を放棄することが決してできないのである。彼はまさに彼の現存在の何ゆえ（Warum）を知っているものであり、したがってまたほとんどいかなる如何に（Wie）にも耐えることができるのである⁷⁾。」

強制収容所、それは徹底的に人間性を否定する状況にあった。それ故にこそ、その極限状況の中で人間が生きることによって何がざりざり本質的なものがフランクルに見えてくるのである。例えば数週間の収容所生活の後には苦悩する人、病人、死につつある人、死者は当たり前の風景になってしまい、もはや人の心を動かさなくなる⁸⁾。囚人たちのこのような信じられない無感動・無感覚は、自分の生命を維持するという最も原始的な関心に役立たないすべてのものが無価値である、と言うことの感情的表現にほかならないのであり、この事は囚人たちのあらゆる高次の関心をなえさせる結果となる⁹⁾。しかしそうした中にも、少数ではあるが、他人にやさしい言葉をかけたり、最後のパンの一片を与えて歩く人がいた¹⁰⁾。与えられた事態に対しあれこれの態度をとることができるという最後の内的自由を、人間から決して奪うことはできないのである。人間としての自由と尊厳を放棄させて、単なる外的条件のおもちゃになるよう絶対に強制してくる収容所のような環境においてさえも、我々は典型的な収容所囚人になるか、それとも人間としての尊厳を守って一人の人間にとどまるか、内的に決断できるのである¹¹⁾。人間は自然的社会的な環境世界や心身的な内面的世界に対し常に何らかの態度を取ることができる自由な存在である。「自由とは本質的に、何かに対する自由である。つまりあるもの《からの自由》であるとともにあるもの《への自由》でもある。」¹²⁾それ故、何らかの制約からの自由のみでなく、人生の呼びかけに答えると言う意味で責任を引き受けることへの自由をもっている。例えば人間が衝動に身を任すことがあるにしても、身を任すかどうかはその人の責任なのである。確かに事実として人間は自由でないこともある。しかし別のあり方を選ぶことができるという意味で、人間は常に自由であり、自由でないように思われるのは、自分の自由を自由意志で放棄したからである。自由を持たないのは、自分の自由を捨てたからにはほかならない¹³⁾。精神的なものは人間のうちにある自由なものであり、人間は精神的な自由の故に、あらゆ

る境遇（外面的な境遇だけでなく、素質と呼ばれる内面的境遇も含めて）に従うか抗うか、どちらかの決断を下すことができるのであり、状況に埋没することなく、どのような境遇にも抵抗できるのである¹⁴⁾。こうした自由な責任存在としての人間が、その時々状況のもとで、人生に責任をもって答えるよう、人生から問いかけられているのである¹⁵⁾。しかも誰でもないこのわたしが、今ここでなすべきことと言う意味で、人生からの具体的な問いに、具体的に答えなければならぬのである。ほかならぬこのわたしが、今ここで、という人間存在の独自性と意味実現の機会の一回性故に、フランクルはそうした人間存在を実存と呼ぶ。「どんなときにも人生にはなすべきことがあり、実現すべき意味がある。それは発見され実現されることを待っている」と言うのがフランクルの基本的な考えである。我々は人生から発せられる問いに詮索や口先ではなくて、行為によって正しく答えようと努めればよいのであって、もはや人生の意味について一般的にあれこれ思い悩む必要はないのである。

ではその意味をどのようにして見いだしたらよいのであろうか。

「人間は、意味への意志によって、意味を探し求めるだけでなく、また次の三つの仕方で意味を見いだすものである。まず第一に、人間は何かを行ったり創造したりすることの内に意味を見る。さらに、人間は何かを体験したり誰かを愛したりすることの内に意味を見る。しかしまた人間は、場合によっては、彼がどうしようもなく直面する絶望的な状況においても事情によって意味を見る。それは、人間が避けることも変えることできない運命に出会ったときに取る心構えと態度次第である。この心構えと態度によって、人間はその人にしかできないあることを、つまり苦悩を一つの業績に転換することを証明することができるのである。」¹⁶⁾

ここでの意味を見いだす三つの仕方に、それぞれ創造価値、体験価値、態度価値が対応する。「最初のカテゴリー [創造価値] は行動によって現実化され、体験価値は世界（自然、芸術）の受動的な受容によって私の中に現実化される。それに対して態度価値はある変化し得ないもの、何か運命的なもの、がそのようなものとして受け入れられねばならないような場合には、いたるところで現実化される。人間がかかるものをいかに自らに引き受けるかというその様式におい

て、計りしれない価値可能性の豊かさが生じるのである。すなわち創造や喜びの中で人間の人生が充たされ得るばかりでなく、また苦悩においてすら充たされ得るのである。』¹⁷ これら三つの価値は我々が実現すべき意味を見いだす指標になり得るのであり、創造価値と体験価値が奪われた人でも、なお正しく苦悩することの意味実現の可能性は残されており、この態度価値の存在こそいついかなるときも人生が意味をもつことをやめない理由である。我々はこうした価値を手掛かりに、我々のおかれた具体的状況の中で、人生からまさにこのわたしが、今ここで、実現するべく期待されている意味を見だし、それを現実化して行く、それが実存的空虚克服の第一歩である¹⁸。ところで、伝統の崩壊は実存的空虚の「部分的原因」¹⁹であり、フランクはその原因としてさらに「学問上のニヒリズム」²⁰と言われる科学的な還元主義を考えている。我々は彼の還元主義批判を通して、自己超越性という実存の本質に導かれ、そこにおいて実存的空虚克服の真の根拠を見出すことになる。そこで次に人間の全体性と超越性をみていくことにしよう。

2. 還元主義批判と自己超越性

ニヒリズムとは、本来「存在を否定する」というよりも「存在の意味を否定」と言うほうが当たっているだろう。フランクによると、現代ではそれは「～に過ぎない (nichts als)」という形で、科学的還元主義のうちにその正体を現わす²¹。そこでは、現実が存在の一つの層に還元され、現実はそのが導き出されてくるところのものに過ぎないと主張される²²。彼によると現実が何に還元されるかで、主に三つのニヒリズムの変種が区別される。つまり、現実を生理的現実還元する生物学主義、心理的現実還元する心理学主義、社会的現実還元する社会学主義がそれである。これらの世界観においては、それらはそれぞれ、一つの存在の層、つまり、身体的存在、心的存在、社会的存在に限定され、そこにおいて初めて志向性が明らかになるような精神的存在が無視されている²³ので、そこでは意味が経験できなくなる。つまり存在は意味を剝奪されているのである。「精神的存在とともに顧みてはじめて、精神的存在の本質的な意味追求性と価値追求性において、現実の有意義性が充たされ、存在の意味が明らかになり得る」²⁴のである。もちろんこれらの主義は、生理学や心理学、社会学と同一ではない。それらは存在を一つの層に還元すると同

時に自らを絶対化し、それ以外のすべてを相対化するところに生じる。生物学主義は人間存在の中に化学的な自動機械を見だし、人間は条件反射に支配される生物学的メカニズムに過ぎないということになる。心理学主義は人間存在の中に心的装置の自動性のみを考えるので、人間は衝動の束に支配されている心理的メカニズムに過ぎないということになるだろう。社会学主義では人間は社会的権力のボールに過ぎなくなる。ここでは人間はあたかも「操り人形」²⁵のようにあつかわれ、人間に似てはいるが、人間ではない何物かに作りかえられてしまう。

「もろもろの主義はお互いに争う。これらの主義のそれぞれが、いずれも自分の一面的な見方でもって、単に唯一つの存在の相を見ている。それぞれの主義は、その現実全体を、次元的に充溢しているにもかかわらず、そうした存在の相の平面に投射している。このような平面は本来的存在となり、残りの他のものはすべて非本来的となる。他のものは見かけとになってしまう。……このようにして結局のところ、すべては仮象となる。つまりすべては空虚である。……すべての主義の背後には、同一のニヒリズムが存在するのである。」²⁶

「人間は結局～に過ぎない」という還元主義の人間理解によると、人間は生物学的なもの、心理学的なもの、社会的なものに縛られており、これらの制約に操られるがままの存在のように見なされている。しかしフランクによると、人間は「自然的な所与に対して自ら態度をとる」のであり、「生物学的なもの(民族)、社会的なもの(階級)、心理学的なもの(性格学的類型)の制約につながれ盲目的に従うことをやめる」²⁷ことができるのである。この自然に対する精神の自由こそ人間の本質を形成する²⁸。「身体的なものとの心的なものとの統一によってのみ人間の全体が構成されるのではない。人間の全体性には第三のものが必要」²⁹であり、「精神的なもの、精神的な人格こそが、はじめて人間一般におけるすべての統一性を作り上げているものなのである」³⁰人間は身体的なもの、心理学的なもの、精神的なもの三者の層構造から成っており、それらの中には質的な違いがあるが、しかし、その層構造は精神的なものを軸として統一されている。フランクはこのような構造的な統一性を壊さずに、質的な相違を説明するために、次元的存在論(die Dimensionalontologie)を展開する。彼がその存在論の二つ

の法則を説明のため使用する図の一つは、三次元のコップが水平及び垂直の二次元的平面に投影された図（水平方向では長方形、垂直方向では円が映し出される）であり、もう一つは、全く異なった立体である円柱、球、円錐が同一垂直二次元平面に投影されると、いずれも同じ円になるという図である³¹⁾。人間は三次元空間で初めて正確に捉えられるのに、それを二次元平面に投影すると、全く別の人間の一面が人間の像となる。人間は生物学的な次元に投影されたときと心理学的な次元に投影されたときとそれぞれ異なった像を示すが、それ自身は同一のより高次の存在であり得るのである。また二次元平面に投影された円のみからは、そのもとになっている立体が円柱なのか、球なのか、円錐なのか分からないように、人間が心理学的平面に投影されると、例えば仕事の充実感も麻薬による快感も、同じ快という心理状態にされてしまい、その快が何によってもたらされたのかがあいまいにされてしまう。存在の一つの層を分離させ絶対化する三つの主義からなされた人間理解、そこから人間の本質は現れてこない。人間は一見「～に過ぎない」存在のように見えるが、それ以上のものであり、精神的なものこそ人間にとって本来的なものである。

ところでニヒリズムとは、以上からすると、人間が欲望追求に駆り立てられることによって実存的空虚感を麻痺させる（もっぱら心身的次元のみを使っている自己中心的状態）と言う、いわゆる人間存在の本質（精神的な人格の次元）忘却が一般化している状態を指すと言えるが、「人間は決して、生命の力、社会的な力によって一義的に規定されるのではなく、むしろそれらの力からは自由であって、自己規定に対して責任をもつ。」³²⁾しかし人間固有の存在が問題になる限り、人間は自由に態度を取り、決断する存在である（自律性）という実存性の指摘に止まることはできず、人間は意味や価値への志向性をもつ、世界に開かれた超越的存在でもあり得ることが指摘されねばならない³³⁾。

「人間であることは、既に自己自身を超えてあることを意味している。……人間であることは、常に既に、あるものまたは誰かに向かって方向づけられ、秩序づけられてあること、その人が専念している仕事や愛している人間、さらにその人が仕えている神に引き渡されてあるということの意味する。」³⁴⁾

人間は、精神的に在る者として、そのつど考える

もの、触れるものすべてのもとに在る。この「もとに一在ること（Bei-sein）」は空間的なものではなく、存在論的なもので、現実的に働いていると言う意味で、現に他の存在者のもとに同時に在る³⁵⁾。人間は精神的な存在としてこのような志向性をもっており、自分自身を超えて意味や価値を求め、そのような仕方で世界へと方向づけられている。それ故人間は自分以外の他のものへ超越する程度に応じて意味を実現することになる。では存在に何かある意味を勝手に付け加えるのではなく、意味そのものを発見することはいかにして可能であろうか。

「あらゆる個々の状況には要請的性格が内在しており、その状況に直面している人格が充たさなければならぬ意味が内在している。そして《この状況の要求》は《客観的な性質》と見なされるべきである。」³⁶⁾

人生は隠し絵のようなもので、意味は客観的なものである。それゆえ、LSDを服用する若者が無意味さから逃避することで満足を感じるとしても、そのように主観の意味感を手に入れることと、根源的な意味への意志が充たされることとは異なるのである。「良心とは、意味ゲシュタルトを具体的な人生のさまざまな状況において知覚する能力」³⁷⁾であり、具体的状況における意味探求においてこの良心が我々を導くのである。

ところで人間は神のように自らのことを「わたしは在るところのものである」と言うことができない。人間は常にまず「なる」のであり、自らについて、わたしはわたしがなるところのものであると言い得るのみである。つまり我々は、神のような純粹現実態ではなく、我々がその可能態であるところの現実態になるのである。人間においては現実存在と本質との分離は固有のものであり、現実存在を本質に近づけることが人間存在の意味をなす。そこで重要なのは、本質そのもの（人間が実現し、表現すべき人間の本質）ではなく、それぞれその人の本質、その人のために取っておかれた価値の可能性を現実化することである。わたしは人間であるべきだというだけでなく、また私自身になることが重要なのである³⁸⁾。人間は「自分の一つの実存をもって《いろいろな役》、《いろいろな人物》を《演じ》、生命を与え、具現する。」³⁹⁾生の意味が、このように自分になるのことだとしたら、生の意味は常に具体的に立てられ、現実的に答えられる。意味を問う

ことが可能である限り、具体的な人格と具体的状況の意味が問われなければならないが、これを導くのが良心である。良心は「具体的な人格がその具体的な状況においてもつとところの、一回きりの、唯一無二の可能性」⁴⁰を切り開く。しかしそうであるにもかかわらず、良心は我々を誤らせないとも限らない。いや「我々の良心という意味—器官が結局意味錯覚を免れなかったかどうか、我々には死の床ですらわからない」⁴¹とも言われるのである。そうすると、我々の意味探求と価値実現の営み全体がその錯覚可能性ゆえに再び無意味になりそうであるが、それはむしろ、我々が常にただ部分事象の意味のみをたずね得るのであって、世界全体の意味や我々の生の最終目的は「捉え得ないのみならず、捉え得るもの以上である」⁴²ことを指し示すものであろう。全体の意味は人間の理解力を超えており、全体は限界概念として捉えられるに過ぎない。それゆえ全体は意味をもたない。しかしそれは「有意味を越えている」という意味で「超意味Übersinn」をもつ⁴³。「全体を見渡せないこと、この全体が意味に充ちていることをみとおすことができないこと、超意味の証明ができないこと、これらのことを自ら引き受けることが現存在に本来属している。この意味で……超意味を信じるのが意味をもつだけでなく、これからは超意味の信仰が意味であると言うことができる。」⁴⁴「超意味は《結果》において初めて与えられるのであって、意図において与えられない。」⁴⁵それは摂理のようにあらかじめ知ることはできないのである。我々は「超意味を頼みにすることはできるが、それを期待はしない。」⁴⁶我々は超意味を前提にして、それが我々の行為の結果に混入してくるのを当てにしないのであって、あくまで「すべてが唯一独自のわたしの一切の行動に依存しているかのように、そしてまた、すべてがあたかもわたしのやることなすことにかかっているかのように、行動しなければならない。」⁴⁷しかしそれにもかかわらず「超意味はわたしの一切の行動とは無関係にしみわたっている」⁴⁸のである。こうした超意味への信仰が、「すべては無意味である」と考えるニヒリズムを最終的に打ち破る。

フランクフルトによると、人間という存在の超越的本質性を捉えるためには、人間を絶えず人間の側から理解することを断念しなければならない。なぜなら人間は動物と違って世界に開かれた存在であり、どのような環境も突き破り、本来の世界そのものさらには超世界へと突き進むものである⁴⁹。

「人間の存在論は開かれたままで、すなわち世界と超世界に向かって開かれていなければならない。それは超越への扉を開けておかねばならない。しかし開かれた扉からは絶対者が影を落としている。」⁵⁰

例えば人間の意志の自由は「衝動存在から責任存在に向かっての、つまり良心の所有に向かっての自由」⁵¹である。しかし我々をこのように完全な責任存在と理解するのみならず、「良心の僕」たるべきものと解するならば、良心はわたしの単なる人間存在を超えた現象となる。そのとき、良心の現象は、その心理的事実性においてよりも、その本質的な超越性において把握され、良心が「何かたのものの代弁者」⁵²となる。今や「人間の人格の有する良心を通して人間の外に在る一つの審判の音が響き渡る」⁵³「良心は超越の声である。そしてその限りにおいて、それ自体超越的である。」⁵⁴換言すれば良心とは「超越者である汝の言葉」⁵⁵にはかならない。良心は無意識の精神性の領域に根差しており、そこには「人間のそれ自身隠されたものである神に対する隠された関係」⁵⁶がある。人間は「絶対的なものへの自己の関係、したがって本来《関係し得ないもの》への自己の関係性」⁵⁷のうちで守られているのである。

3. フランクフルトへの疑問

フランクフルトの語る人間存在の自己超越性には二つの側面が在る。一つは我々とは異なる他者への超越、つまり「世界」への超越で、我々はそこでは、具体的状況の中でそのつど具体的な意味を見いだし、価値を実現して行く。そしてもう一つは「超世界」への超越。後者においては、我々は神との隠れた関係に守られながら、神に聴従しつつ、それに答えて行くことになる。

「人間たちは俳優が舞台上にあるのと同じように人生の中に立っているということが本当であるとすれば、われわれは、俳優がライトに眼がくらんで、観客席のところに大きな黒い穴以外の何も見ることができない有様を思い起こすことができる。彼は自分が《誰の前で》演技しているのかを見ることができない。人間もこれと似たような状態に在るのではなからうか。人間も日常性の《外観》に眼がくらんで、自分が《誰の前で》自らの現存在の責任を(俳優が自らの役割を引き受けるように)《担ってい

る》のかを知らない。彼は誰の前で行動しているのか見えないのである。しかし我々が《なにも》見えないまさにその場所に大なる観客が座っており、わき目もふらずに我々を見つめていると考えている人びとが、いつの場合にもいる。このような人々は、我々に向かって、注意したまえ、君は開かれた幕の前に立っているのだと叫びかけてくる人々なのである。』⁵⁸⁾

我々が決してその姿を見ることができない、闇の中から我々を見つめている「大なる観客」(神)の前で、我々は人生をおくっているのであり、そこは救いの場であると同時に審きの場である。そこで重要なことは、神に聴従しつつ、それに正確に答えて行くと言うことであり、我々が自由な責任存在であるのはまさにそのためである。しかし神との関係を離れた単なる人間の次元で見れば、我々は神との関係に対し「ノー」と言える自由が許された存在でもある。フランクルの生きる意味についての思索を理解するためには、この二つの次元の区別と関係がどのようになっているのか明確にしていかななくてはならないのであるが、滝沢克巳は『フランクルのロゴセラピーとキリスト教の福音』という論文において、この点に関するフランクルの曖昧さを指摘する。そこでまず滝沢のフランクル批判を紹介し、それとの関係で筆者のフランクルに対する疑問を問題にしてみよう。

滝沢のフランクル批判の要点は、生きる意味の考察に際し、「ただ人間の次元と超人間的次元を区別するというのではなくて、どこか分離するようなところがある」⁵⁹⁾という点にある。「フランクルのいう「意味」の中で第一の意味は決して主観的な状態や思想や情緒ではなくて、客観的なものであり、人間の思いに全く先立って人に与えられており、そのつど与えられてくるものであって、人間の意志からは全然独立なものであった。……フランクルが生命のほんとうの意味という時の第一義的な意味は決して普通の意味の人間の価値ではない。それは人間に価値があるかないかということとは全然独立に、それとは無関係に各自に与えられているもの、与えられてくるものである。そういう生命の意味は、誰も自分はそれに関係ないと言えないように人間に絶対的に内在すると言えるが、しかしその意味は人の思いや功績とは全然異なるという意味で全く超越的でもある。』⁶⁰⁾このほんとうの生命の超越的な第一義の意味に対し、「フランクルは人生の価値、意味ある人生という時、創造価値、鑑賞価値、態度価値

を挙げ、人間はどんなに追いつめられても、少なくとも態度価値を実現することはできるし、そのことによって意味ある人生を送れるのだという。……しかし人間が実現できる価値、私は意味ある人生を送ったという場合の意味は、人間の業そのものの性格であって、人間の業や思いに先立って人間に与えられてくる根源的に客観的な意味とは異なる。それは根源的に客観的な意味があって初めて出てくる第二義的な意味であり、態度価値も含めてそうである。それ故第一義的な意味は超意味といわなければならない。人生のほんとうの意味は超意味としてしか人間に与えられていないのである。』⁶¹⁾超人間的な次元と人間の次元とは決して離れ離れにあるのではないし、フランクルも超人間的次元と結び付けられた人間の次元を扱っている。しかし残念なことに「超人間的次元と人間の次元は区別されながら一つであり、一つでありながら区別されているという弁証法的関係—この点がフランクルでは十分よく見きわめられていないように見える。』⁶²⁾

人間が実現できる価値、それは人間業の次元に属する。このような価値は客観的なものであるが、しかし、それはわたしが具体的状況のもとでもっているそのつど一回きりの、誰でもないこの私にとっての価値の実現であり、常に相対的なものである。(一般に価値相対主義が主張するように、価値評価する主体に対して相対的ではなく、絶対的な価値に対して相対的である。)フランクルによると、一般に絶対の価値によってのみ、価値評価が行われる。「それゆえ価値は結局、すべての評価に際し、神の調停裁判所に召喚され、この調停裁判所によって価値は秩序へと呼びかけられる。つまり、価値は順序づけられ、価値序列の内に置かれる。』⁶³⁾このことは人間理解にも当てはまるのであり、人間はその被造性において自分を理解しない限り、如何にあるべきかを描くことはできないのである。「人間が自分のことを測り得るのは、ただ絶対的なもの、一つの絶対的な価値、つまり神においてである。』⁶⁴⁾彼においてはこのように価値や自己実現の最終的評価の基準は神と見なされているが、他方では人間には自分の人生の意味を本当に充たしたのかどうか、言い換えれば自分が真理を所有しているのかどうか最後まで分からないと言われる⁶⁵⁾。そこでフランクルは超意味への信仰と言う言葉を使うのであろうが、こうした超意味(あるいは摂理)を知ることができない、という我々の認識の限界性はそれなりに認められるにしても、「人間の尊厳は人間の自由のうちに基礎づけられる。しかもその自由は、拒絶すらも含む自由、し

たがって人間が神に対して自らを閉ざすべく決意することすらをも含む自由である]⁶⁶と語るとき、超人間的次元の人間の次元に対する関係(滝沢の言う不可分、不可同、不可逆性なる関係⁶⁷)が見損なわれているように感じる。滝沢によると、本当の生きる意味は我々の思いに先立って、我々の意志から全く独立に与えられている、そこを土台にして我々の具体的な価値実現の責任が出てくるのであり、彼のロゴセラピーという療法もそのうえに営まれるのである。彼の療法が「意味のない人生は原理的に不可能であり、意味のない状況、境遇は実際にはないので、それがあのように思われるのは自分を中心にし、自分を先立てて、その自分の内容の充実を図るからであること、そのことに患者自身が目覚める時を、医者はまだ患者を慰めつつ、励ましつつ待つ」⁶⁸というところに在るならば、「神に対して自らを閉ざすべく決意する」自由が本当の自由になり得るのかどうか、その自由の記述も問題になってくるであろう。それは超人間的次元から人間的次元を切り離れた事実性の次元においてのみ語り得ることである。フランク自身は、おそらく自らのロゴセラピーを宗教とは峻別しつつ、一つの医学療法としての独立性を強調するためそのように語ったのであろう。また彼が拒絶の自由を語るのは、信仰が人間の主体的決断によると考えているからであろうが、生命の超越的な第一義的意味は、そのような決断とはかわりなく、もともと人間に恵まれてくるものであるから、そこではノーという自由はないのである。滝沢の言うように、フランクにはどこかで超人間的次元と人間的次元を分離しているところがあると言えよう。

ところで人間は自由な存在として精神的な次元のうちにある⁶⁹。その中心は「精神的深層人格(die geistige Tiefenperson)」⁷⁰であり、決して反省されることのない無意識的なもので、それは決して対象化されることのない本来的な自己である。この反省不可能な自己は自らの実現(作用遂行)においてのみ実存するものであり、「それ以上還元できない原現象(ein Urphänomen)」⁷¹である。そして、意味への問はこの自分自身の根源に向かってもなされ得るが、事実性の意味を問うだけでなく、自分自身の実存性(意味を問うところのこの自分の存在)の意味を問うことは、意味を問うことの意味を問うこととなり無意味である。実存は自分自身を根本的に究明することができないのである⁷²。それは、「我々が存在論的なものの中へと超越することを通じてのみ解明され得るのである。」⁷³しかし、たとえ存在的な考察の次元で解明されない問題と

しても、その深層人格が自己中心的でないとはいえずとも言うことは出来ないであろう。例えば仏教の唯識思想ではマナ識と言うものが我々の深層にあり、それは「ひたすら自分のことを思量し続ける自己中心的・利己的作用のくこころ」⁷⁴であると言われる。この自分に執着するところは、我々の深層に深く隠れているのでなかなか気づかれないが、それが無意識的な深層領域で働いていることは唯識では体験的事実である。それによると深層人格自身が自己のいろんな姿として現れるとき、それと意識しないうちに自分の選んだ自己のあり方に執着するというところの働きが生じてくることになる。例えば、口で正義や平和をとをえぬのみならず、行動においてもそれにふさわしい行動を取るかに見える人達が、またほとんどの場合、自己を支えとして、自己をまず立て、その自分の内容を図るというエゴの立場を捨てないままである。そしてその限り、その正義や平和も、ひそかに自分にとって都合のよいものに歪められ、行動においても自己を正義として反対するものを不正に排除するということがやむことはない。このように我々の自我そのものの深層に巣くうエゴイズムはフランクの場合問題にされていないようである⁷⁵。そしてこのことはまた超人間的次元と人間的次元の区別と関係にかかわる重要な問題であるだけに、滝沢のフランク批判とあわせて問題にされる点ではないかと思う。

注

- 1) Frankl, Viktor E., *Der Wille zum Sinn*, München 1991, S. 12. (以下 WS と略し、ページのみ記す。)
- 2) Frankl, Viktor E., ... *trotzdem Ja zum Leben: Eine Psychologe erlebt das Konzentrationslager*, München 1982, S. 113. (以下 PEK と略し、ページのみを記す。)
- 3) Frankl, Viktor E.: *Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*. Bern 1984. S. 183. (以下 LM と略し、ページのみを記す。)
- 4) Vgl. LM, S. 178.
- 5) PEK, S. 124-125.
- 6) PEK, S. 128-129.
- 7) PEK, S. 129.
- 8) PEK, S. 43.
- 9) PEK, S. 60.
- 10) Frankl, Viktor E., *Ärztliche Seelsorge*, Wien 1982, S. 108. (以下 ÄS と略し、ページのみを記す。)
- 11) PEK, S. 108.
- 12) LM, S. 142.
- 13) *ibid.*
- 14) LM, S. 143.
- 15) ÄS, S. 72.
- 16) WS, S. 29-30.

- 17) ÄS, S. 113–114.
 18) Vgl. WS, S. 29.
 19) WS, S. 25.
 20) WS, S. 139.
 21) WS, S. 13.
 22) LM, S. 163.
 23) ibid.
 24) ibid.
 25) LM, S. 164.
 26) LM, S. 182.
 27) ÄS, S. 37.
 28) ÄS, S. 36.
 29) LM, S. 69.
 30) LM, S. 167.
 31) WS, S. 143–144.
 二つの法則は以下のようなものである。
 法則 1：「同一の物がそれ自身の次元から異なったそれより低い次元に投影された場合、一様に投影図が描かれるが、それぞれの投影図はお互いに相いれない。」
 法則 2：（同一の物でなく）異なったさまざまな物が、（相異なった次元にではなく）それ自身の次元から、それより低い同一の次元に投影されると、一様に投影図が描かれるが、それらの投影図は（互いに矛盾するのではなく）多義的なものになる。
- 32) LM, S. 230.
 33) Vgl. LM, S. 220–221.
 34) WS, S. 145.
 35) LM, S. 87, S. 89.
 36) WS, S. 25–26.
 37) WS, S. 26.
 38) LM, S. 199.
 39) LM, S. 200.
 40) Frankl, Viktor E., Der unbewusste Gott, München 1974, S. 28. (以下 UG と略し、ページのみを記す。)
 41) WS, S. 26.
 42) ÄS, S. 44.
 43) LM, S. 201.
 44) ibid.
 45) LM, S. 202.
 46) ibid.
 47) ibid.
 48) ibid.
 49) LM, S. 222.
 50) ibid.
 51) UG, S. 45.
 52) UG, S. 46.
 53) ibid.
 54) UG, S. 48.
 55) UG, S. 52.
 56) UG, S. 56.
 57) WS, S. 73–74.
 58) WS, S. 107.
 59) 滝沢克己『滝沢克己著作集 7』（法蔵館 1973）439 頁。
 60) 同上書, 440 頁。
 61) 同上書, 441 頁。
 62) 同上
 63) LM, S. 224.
 64) LM, S. 230.
 65) WS, S. 27–28.
 66) UG, S. 68.
 67) この見解は滝沢神学の核心であり、ほとんどの著作に現れる。その一例として、滝沢克己前掲書 110 頁参照。
 68) 同上書 437 頁。
 69) WS, S. 156.
 70) UG, S. 23.
 71) ibid.
 72) LM, S. 201–202.
 73) UG, S. 23.
 74) この点に関しては以下の著作を参照した。
 太田久紀『「唯識」の読み方』（大法輪閣 1985）113 頁。
 牧村牧男『唯識のこころ』（春秋社 2001）85 頁。
 岡野守也『唯識の心理学』（青土社 1999）91 頁。
 75) フランクルにおいては精神的人格が働く現場でそれが意識されることはないであり、無意識の超越的な次元では自己へのとらわれが語られない。特に神への聴従が語られる場合には、自己はあたかも普遍的・客観的に振る舞うかのようにあつかわれている。しかしマナ識が語られる仏教においては、体験的事実として深層での自己へのとらわれが語られる。両者の思想構造が異なるので仏教思想をもって簡単にはフランクルを批判できないが、彼の場合にも、神と人間の関係が具体的に現実へと反映されるとき、自分へのとらわれがおこることになる。彼は本当の生きる意味を見出すため良心の洗練を主張するが、それは神の言葉を聴くよい耳をもつということであって、その洗練の極点では自己へのとらわれがなくなることであろうが、筆者はそうでない限り自己へのとらわれは消えないと思う。